

# 黎明期労働運動と近代文学

——横山源之助と岸上克巳

立花 雄一

---

はじめに

横山源之助と「労働小説」

別記一半如夢

横山源之助と岸上克巳

はじめに

最初の労働雑誌である『労働世界』（片山潜主筆）と近代文学とはどのような関係にあったか。ということは、労働運動の誕生と展開という歴史的な人間の解放運動に、近代文学がどう対決したかを問うことにひとしい。そのような事柄を漠然と念頭におきながら、この小論をすすめてみたい。

日本の労働運動は日清戦争終結とともに到来した産業革命期に起っている。そして、労働組合期成会と鉄工組合の共同機関誌として生まれた『労働世界』は当然のことながら、労働運動の盛衰と運命を共にし、一時日刊『内外新報』に脱皮せんとした期を挟んで、第一次『労働世界』と、復活再刊される第二次『労働世界』とに分かれる。第一次は明治三十（一八九七）年十二月一日～三十四（一九〇一）年十二月二十一日、第一号～第百号、月二回刊。第二次は明治三十五（一九〇二）年四月三日～三十六（一九〇三）年三月改題『社会主義』、月三回刊。

さて、文学との関係については、『日本近代文学大事典』第五巻に記載されてある「労働世界」の項に、小田切秀雄が「創刊当初には内田魯庵らの応援執筆があったが、『社会主義』『労働世界』の後身誌」の時期にとくに著しくなってきたことの一つとして、労働運動と社会主義との啓蒙、宣伝用に、小塚空谷、児玉星人らがさかんに詩やその他の文学形式を利用し、それらのための欄までつくられ」と書いている。また隅谷三喜男は第二次『労働世界』復刻版の解説で、「再刊『労働世界』も片山潜と西川光次郎が中心であり、幸徳秋水、安部磯雄、木下尚江らが社外から応援した。また文苑では小塚空谷、児玉花外が活躍した」と述べているのみである。すなわち、第二次『労働世界』時代——明治三十五～六（一九〇二～三）年の頃になって、ようやく小塚空谷、児玉花外、児玉星人、堺枯川ら、後の社会主義文学者らが加わってくる。あるいは若き日の野口雨情などが。いわば第二次『労働世界』や、後身誌『社会主義』時代は社会主義文学の揺籃期として一応は知ら

れている。しかしながら、黎明期労働運動時代——第一次『労働世界』時代、すなわち明治三十～三十四(一八九七～一九〇一)年の頃は、文学とのかかわりは、小田切秀雄の言に代表されるように、わずかに内田魯庵の「応援執筆」(翻案小説「革命会議」寄稿、『労働世界』第十八～十九号、明治三十一年八～九月)が一つあるだけだという。現在までの近代文学史はそのようにいっている。

果して、そう断じきっていかという反問がこの小論を書かしめるにいたった理由である。近代文学史が叙述するとおりとするならば、あまりにも佻しい。わが国ではじめて、あきらかに一時代を劃する、壮大な人間解放運動が起きていたときに、それまでは服従することのみが徳義とされ、何事にも不服を唱えてはならぬものとされていた労働者らが、<労働は神聖なり>と謳って、労働組合に集まりはじめた。その時に、誰よりも、人間性の問題に敏感であるべき文学界に他にどんな反応もなかったのであろうか。

果せる哉、近代文学史の薄っぺらな通説は、ここに、ルポルタージュ作家横山源之助一人に登場を願うなら、簡単に打ち破られるだろう。なぜなら、『労働世界』のもっとも熱心な書き手が他ならぬ横山源之助であったのだから。ただし、ルポルタージュを文学と認めるか、否かによるが。そして労働運動の歩みと歩調を併せて書きすすめられた、その主著『日本の下層社会』(明治三十二年)を、そのすさまじい人間記録を、文学として享受することができるならであるけれども。そういえば、戦後昭和二十四(一九四九)年五月三十日、『日本の下層社会』が風早八十二の解説付で岩波文庫に復刻され、次いで、その二十日後の同年六月二十日、土屋喬雄解説による中央労働学園版が出版されたとき、雑誌『世界』同年十月号に逸速く「下積みの人間への尽きない愛—『日本の下層社会』」を書き、同書を秀れたルポルタージュとして高く評価したのは、他ならぬ若き日の小田切秀雄であった。にもかかわらず、後年、『労働世界』と文学との関係を述べるにいたったときは、さきにも指摘したように横山源之助の名をまったく逸し去っていたのである。一人名を挙げた内田魯庵を『労働世界』誌上にひっぱりこんだのは、誰でもない『日本の下層社会』の著者横山源之助であったのに。小田切秀雄の脳裡に横山源之助の名がなかったのは、横山源之助が高野房太郎、片山潜とならび、黎明期労働運動の指導者であった事実を知らなかったからにちがいない。なにしろ、歴史書のみならず、労働運動史という運動史がみな横山源之助を没却し去ってきたのだから。

## 横山源之助と「労働小説」

実際、横山源之助と初期労働運動の機関誌『労働世界』とのかかわりは尋常ではない。第一号から、毎号論説、雑文のみならず、無署名記事を書くなど、またある時期は雑誌のなかば以上の記事を一人で書いたり、記事の選択、企画などにも干与し、ほとんど社中にあると同様であった。勿論、他に『毎日新聞』(鳥田三郎社長。現『毎日新聞』とは別)の記者という本職をもっていたのだが。

いま、第一号から第百号までが一冊の合本になっている、部厚い復刻版『労働世界』を開くと、初期労働運動の日々がまざまざとよみがえってくるような、生々しい臨場感に出会う。しかも、それは、多くの者が無学であった、当時の労働者に配慮して、漢字にはすべて振仮名が付けられてある。よく見れば、そこには文苑欄もあるではないか。かつ、それはけっして小さくはないスペースなのである。そして、読み易さ、親しみ易さを工夫し、差別なく、誰にも開放されていた賜である

うか、無名のひとびとの、小説、俳句、短歌、詩、一口噺、講談、随筆などが多数載せられてある。たとえば、当時『労働世界』編輯員であった植松孝昭が平民城の名で、社会小説と銘を打った「暗美人」を数回載せたり、また当時寄席の高座にも上ったことのある、呑気楼三味高松豊次郎が労働演劇のはしりともいえる、労働倶楽部演劇筋書「<sup>みくに</sup>二大發明<sup>ひかり</sup>国家の光輝職工錦」や、一口噺をいくつも掲載したりしている。そのように、文苑は誰にも開放された場であった。その文苑が、やはり横山源之助とも無縁ではなかったのである。——迂闊にも、最近まで、私はそれを見落していたが。それはそれとして、以下、順序を追ってみたい。

『労働世界』第一号が発刊されたのは、最初の労働組合である鉄工組合結成の日と同じ明治三十（一八九七）年十二月一日であり、その結成会場で、まだインクの乾かない第一号が集まった労働者らに配られたという。〈労働は神聖なり〉、〈団結は勢力なり〉という金言を掲げ、毎月一日と十五日に刊行ときまった『労働世界』は、その十五日後の同年十二月十五日に第二号を発行した。その第一～二号に、横山源之助は「資本家の言」を連載した。そして、第二号の末尾を見ると、以下のような「社告」が載っているのである。「来る三十一年一月一日の労働世界は非常なる意匠を凝らし面白き絵を沢山に入れ、寄書、論説、社説も充分に精撰し以て万丈の大気焰を吐かんとす、又た此の初摺より号を追ふて快活雄壮なる労働小説を記載すべし其の題号は「鉄骨児」著者は半如夢氏なり労働世界は其他種々の改良を加へて以て愛読者の厚意に報ぜん」と。号を追って文苑を見ると、この特別予告のある「半如夢氏」が、さらに幾篇も作品を載せているではないか。私が、「半如夢氏」とは、横山源之助に他ならぬことを知ったのは、実はつい最近のことである。なぜ、半如夢が横山源之助の別名であるかは、終項で別記する。いまは、『労働世界』誌上に見当る、半如夢の作品をまずは見ておきたい。

小説鉄骨児 其一 第三号 明治三十一年一月一日 半如夢

同 其二 第四号 同年一月十五日 半如夢

同 其三 第五号 同年二月一日 半如夢

同 其四 第六号 同年二月十五日 半如夢

同 其五 第九号 同年四月一日 半如夢

同 其六 第十一号 同年五月一日 半如夢

同 其七 第十二号 同年五月十五日 半如夢

短歌閑吟十首 第十一号 同年五月一日 半如夢

小説ともかせぎ 第十四号 同年六月十五日 半如夢・我狂

随想奇怪なる現象 第十七号 同年八月一日 半如夢

小説不平党（一） 第二十号 同年九月十五日 半如夢老人

同（二） 第二十一号 同年十月一日 半如夢老人

同（三） 第二十三号 同年十一月一日 半如夢老人

同（四） 第二十六号 同年十二月十五日 半如夢老人

同（五） 第二十七号 同三十二年一月一日 半如夢老人

随想閑想録（一） 雨の日 第二十三号 同三十一年十一月一日 半如夢

同（二） 愛・忍耐 第二十四号 同年十一月十五日 半如夢

半如夢（老人）による作品は以上に列挙したとおりである。

さて、さきにも見たように、明治三十（一八九七）年十二月十五日の『労働世界』第二号「社告」に、半如夢氏「労働小説」掲載予告があり、そして、その「労働小説」はほぼ明治三十一（一八九八）年に集中してあって、その数は合計四篇である。

ところで、問題は初期労働運動機関誌『労働世界』誌上の「労働小説」なるものが、文学史上その時も、今日もまったく埋没したままであることである。そして、その労働小説がうまれた明治三十～三十一（一八九七～八）年頃は、文学界では、日清戦争後の悲惨・深刻小説を超克すべく、新潮流として社会小説論、政治小説論が華々しく議論されたときであり、そういう文学状況を一応念頭におくなら、その中で「労働小説」なるものがいかなる意味と位置を持つことになるか……。ここで、当時の文学界の潮流について、もう少し見ておく必要がある。社会小説という語が文学界に定着するのは、明治二十九（一八九六）年十月三十一日発売の『国民之友』第三二〇号、続いて一週間後の十一月七日の同誌第三二一号が「社会小説出版予告」と題して、齊藤緑雨、広津柳浪、幸田露伴、後藤宙外、嵯峨のや主人、尾崎紅葉等に「社会小説」を書かしめ、毎月または隔月にそれを出版するという広告を掲げた、そしてそれが文学界の注目を浴び様々な議論を醸し出して以来のことである。『国民之友』広告では、悲惨小説の広津柳浪から硯友社の巨頭尾崎紅葉までを含む文学者名が広範囲に、無分別に挙げられてあることから推せられるように、それなら、一体何ををもって社会小説とするか、その規定ははなはだ曖昧であったが故に、それが逆に各方面の議論をよぶ結果となった。たとえば、『早稲田文学』が社会小説を規定し、「貧民または労働社会のために気を吐くもの」（三十年二月）等数項を列挙するなど。しかしながら、『国民之友』が意気高く予告した「社会小説」が実際は実作されなかったように、議論だけが先走り、社会小説論がさらに政治小説論を呼ぶなどしながら、実作を創出する素地はまだ熟してはいなかったのである。

このように、明治二十九（一八九六）年十～十一月に掲げられた『国民之友』の「社会小説出版」広告が日清戦争の戦後の状況のなかで、具体的には何を拠りどころにして発せられたか模糊としていたが、これより七ヶ月前、そのころ下層社会探訪報告からさらに労働社会報告へと進出せんとしていた、ルポルタージュ作家横山源之助に、先蹤的といつていい社会小説論が一つある。それは『毎日新聞』明治二十九年三月四、七～八、一三日に掲載された、会見記「坪内逍遙と語る」の中にあるが、そこにははっきりと括弧付きで、「社会小説」という語が遣われ、以下のような行があったのである。「小説家の社会を觀る眼の鈍にしてお坊ちやまなるに愕く、幾程同情して褒めやうと思ふて読んで見て少しも感服することは出来ずして是が社会の実相なるかと仰天するもの常なり、徒に想像を描いて而して深刻なり精細なりと世間に評判せられ、批評家なる者亦た之に附和して」と、逍遙に向かい、記者（＝横山源之助）の「平成思へるもの」が語られ、また「鬱するものあり悶ゆるものあり憤るものありて歐洲の詩人小説家は思想を社会の暗黒面に注ぎ筆を悲惨の事実に向けたるものなるべしと雖も、我日本の詩人小説家（所謂新派なる者）はそんな社会の实情に激して乃ち眼を暗黒面の上に注げるものとも見えず」といつていたのである。

この反語的社会小説論は『国民之友』の「社会小説出版」広告の魁的位置にあつたろう。このよ

うに、横山源之助が先に発した社会小説論は日本文学の現状を鋭く剔抉するとともに時代を一歩リードしていたのである。すなわち、社会小説の展望を先に切り開いていたばかりか、翌明治三十一年（一九〇七）年十二月一日最始の労働組合である鉄工組合が組織され、労働運動が開幕するや、その機関誌である『労働世界』第二号（同年十二月十五日）に「労働小説」を予告し、続く第三号（翌三十一年一月一日）以降に「鉄骨児」以下の労働小説を掲載した。社会小説論の代表的作品とされる、金子筑水の「所謂社会小説」が『早稲田文学』に掲げられたのが同三十一年二月である。社会小説の唯一の成功作とされる、内田不知庵の『くれの廿八日』が同年三月。社会小説と銘打った、平民城（植松考昭）の「暗美人」が『労働世界』に、半如夢の労働小説とは別に、載ったのが同年六月。そして内田魯庵（不知庵）の「革命会議」が『労働世界』第十八～十九号に掲載されたのが同年八～九月。おなじ内田魯庵の「政治小説を作るべき好時期」が書かれたのが同年九月。

このように見ると、社会小説（論）、政治小説論、労働小説と、三者の絡みは微妙であろう。だが、ひとり「労働小説」のみが文学史上に記載がない。それは労働雑誌上という、文学界、文学研究者とは無縁な世界の記事であったからであろう。だがしかし、早稲田（東京専門学校）から西川光二郎らが初期労働運動の中にとびこんで行くように、挙げて社会小説を提唱するかの感があった、金子筑水ら早稲田派の若い文学者らが労働運動という新しい社会の激動に衝き動かされ、『労働世界』を手にとっていなかったらどうか。また『くれの廿八日』を書き、政治小説の先唱者となる内田魯庵にいたっては、労働小説の創出者である半如夢こと横山源之助と三日と空けず顔を合わせていて、その横山源之助の慫慂で翻案小説「革命会議」を労働小説の誕生誌である『労働世界』に寄稿までしていたのである。

ともあれ、かくして「労働小説」は、労働運動の開幕同様、日本史上にはない、まったく新しい文学的実験を試みんとして登場した。しかしながら、「労働小説」という呼称は『労働世界』第二号「社告」以外、どこにも見出せない。ということは、「労働小説」は半如夢作の小説に冠せられたのみで、文学史上終ったということになるのであろう。さて、急ぎ作品を点検しよう。

半如夢の第一作「鉄骨児」は『労働世界』第三号から第十二号まで、発行年月に直せば明治三十一年（一九〇八）年一月一日から同年五月十五日まで、七回にわたって連載された。題名の鉄骨児とは、勿論硬骨漢、熱血漢の意である。父母に早くに死に別れ、今は学資の途に窮して人力車夫に身をおとしている若者が、正月早々雪が降った後のぬかるみ道で、煮豆売の爺さんが酔った若者たちから難癖をつけられているのを救ける。丁度そこを通り合わせた、今は郷里に帰って医者となっている、かつての学友の紹介で、彼は某官吏のお抱え車夫となる。一応生活は安定し、勉学にも身が入るようになるが、その家の令嬢の横恋慕に遇って、下女との仲を主人に誣告され、その家を追放される。偶然その下女はかつて雪のぬかるみ道で救けた煮豆売の孫娘であった。その失職を機に、若者はもう一人の学友を頼って渡米をするという筋道である。これが『労働世界』が「社告」で予告した「快活雄壯なる労働小説」であるか否か。序に（完）後に記されてある、作者半如夢の弁を聞く。「題して鉄骨児と云ふ、予が意気込み素より其処に在りしと云ふと雖も、如何せん不才凡筆の致処、稜々焉たる渠鉄骨児をして、あはれ徑々為す無きの豎子たらしめしは、予が水茎の岡の葛葉返す返すも武次郎〔主人公の名〕君に謝すると同時に、亦た只管読者諸彦にお詫び申す次第なり、尤も這は此れ丈にて完結せしと云ふにも非ざれば、他日好機を得たらん折、更に渡米後渠が活

動の様を描かんことを期す、乞ふ諒せよ。」とある。「労働小説」は常に「快活雄壯」でなければならぬわけではないから、これはこれでよからう。かなり飛躍があるが。ところで、内田魯庵の、メキシコ渡航を意図した『くれの廿八日』が書かれたのは、「鉄骨児」が連載中の同年三月であった。「鉄骨児」は渡米である。なんと微妙な行先の違いであろう。序にすこし横道に外れるが、労働小説も、「鉄骨児」の存在も知らなかったはずの文学者猪野謙二がかつて『くれの廿八日』論のなかで、魯庵の友人横山源之助の渡航云々といっていたことがふと頭の隅をよぎる。

次の第十一号（明治三十一年五月一日）上にある、半如夢署名の短歌「閑吟十首」はどうか。その中の一首に「古郷を思ひ出で、堪へぬまゝに詠める」とある。そして

思ひいで越路のそらを眺れば  
いつぢゆくらん雁のひとつら

とある。横山源之助の故郷は越路（北陸道、富山県）であることを想起したい。半如夢が横山源之助であることを示唆する一端であろう。

次は第十四号（明治三十一年六月十五日）上にある、小説の第二作「ともかせぎ」である。これには、半如夢と我狂の二人の署名がある。そして続き物を予定していたものか、「一」のみがあって、「二」以下は見当たらない。これはいつもせつせと内職仕事に励んでいる若女房と近所の婆さんとの茶飲み話であるが、対話はいきいきとしている。この頃の『労働世界』には、横山源之助のすすめで、家庭欄が設けられて、労働者家庭の消息に目を行きとどかせるようになっていた。この小篇もそういう意嚮に添ったものであったろうか。

次の第十七号（明治三十一年八月一日）上に見える「奇怪なる現象」は社会時評である。婦徳会の看板を掲げた四人の女大夫の女権拡張演説会を浮薄とし、珍しいからといって騒いでいる社会状況を批判。

さて、この後にあるのは、半如夢老人の署名になる、第二十～第二十七号（明治三十一年九月十五日～三十二年一月一日）に断続五回連載された「不平党」であるが、これこそは文字通り「労働小説」の名にふさわしい。その意味でもっとも注目されている作品であろう。なぜなら、これはこの年、すなわち明治三十一年（一八九八）年二月、わが国最初の鉄道ストとされる、日本鉄道機関方が福島機関部を中心にして待遇改善を掲げて同盟罷業に突入し、上野・青森間の列車が運休、四月に要求を貫徹した、この熱々のニュース、この目前の状況に真正面からぶつかって書かれた作品であったからである。作品の第一回小題は（一）万物之靈長。続いて（二）大不平の檄文。（三）檄文の続き。（四）密議。（五）嘆願書。以上を以て終る。すなわち秘密の檄文を受けとったはじめから、会合を経て、檄文のアピール通り各支部毎に一斉に要求書を作成して本社へ送りつける。こうしてついに立ち上るにいたった経過が檄文や嘆願書という生の資料を遣って書かれている。事実、第三回末尾に、作者が作中の檄文につき、「此は専ら跨雲君編の『待遇期成大同盟会一ノ関支部記事』に依れるもの、作者の君に負ふ処蓋し尠少ならざるなり」とわざわざコメントを付けているように、それは罷業終結直後の「明治三十一年四月」、当事者跨雲仙史によって編まれ、非売品として各所に配布された一件報告書「待遇期成大同盟会一ノ関支部記事」が出所であった。それは今日『日本労働運動史料』第二巻に、全文が収録されてあるとおりである。とくに蹶起アピール「我党待遇期成大同盟会」は、前年に職工義友会（労働組合期成会前身）が出した、労働運動史上最初の

呼掛けである「職工諸君に寄す」とともに双璧とっていい歴史的名文である。いかにも匂い立つような、その歴史的文書を手にとった感動が労働小説「不平党」を一気に書かしたものにちがいない。そういえば、日鉄機関方が一斉に同盟罷業に入ったと知ったとき、「機関方たる者、同盟休業は労働者の権理問題たるを思ひ未来永遠数十万数千万労働者の亀鑑たるへき覚悟を以て我日本労働史上の第一ページに光彩あらしめよ」（『毎日新聞』明治三十一年三月九日「偶筆」）と、まるで歴史の碑に刻みつけるように筆をとったのは、他ならぬ横山源之助であった。それもまた、前二文にも劣らず称されていい、労働運動史を飾る記念的碑文ではないか。

しかしながら、労働小説「不平党」が労働運動史上きわめて高い評価を浴びねばならぬ理由があるとしても——労働運動史上でも、まったく無視されてきた——文学である以上、やはり問題はどれほど作品が文学たりえているかであろう。とすると、惜しむらくは、作品は資料「待遇期成大同盟会一ノ関支部記事」に頼り過ぎて嫌いだがあり、その意味で、これをプロパガンダ文学であるとするか否か、評価は微妙に分かれるところであろう。しかしながら、文学と労働運動との切点、この作品によってはじめて刻まれた事実のみは消し去ることはできないだろう。

ちなみにいえば、横山源之助が『日本の下層社会』の編成執筆にうちこんでいたのは、明治三十一（一八九八）年九月から十二月末頃にかけてである。労働小説「不平党」の『労働世界』掲載時は、なんと『日本の下層社会』執筆時とまったく同じ、同年九月十五日から翌年一月一日までである。不思議にも、この二つは、まるで励まし合うようにして、同時併行して書かれていたことになるではないか。日本鉄道機関方のストライキという未曾有の激動の発生が、労働者階級の解放のために書かれている『日本の下層社会』の成立にどれほどにおおきな刺戟と激励になっていたのであろう。ここに、労働小説の創始と『日本の下層社会』との成立に不可分の繋を見ないわけにはいかない。

さて、次にある半如夢の作品は、原稿用紙にすれば一枚に充たないような、短文のパンセ「閑想録」(一)(二)である。これは第二十三号～第二十四号（明治三十一年十一月一日と十一月十五日）に載った。(一)には「雨の日」一題のみ。(二)には「愛」と「忍耐」の二題。

そして、最後は第二十五号（明治三十一年十二月一日）上にある、小説の第四作「白馬銀鞍」である。——静岡の薬種店回生堂の一人娘お松は何不自由なく育ち、東都へ遊学を許されるが、回生堂のほうは一年に続いて三回も火事に見舞われ、主人は病の床につき、あげくに店の金は番頭に持逃げされるなどの災禍が重なり、店はついに潰えんとする所へ、一人娘お松が東京から白馬銀鞍の公達を連れて帰る。店は繁昌し、娘は東京で交際場裡の女王と仰がれる山川伯爵夫人になるという。まるで、禍福は変転常ならず訪れるという塞翁が馬の故事を画にかいたような短篇である。

さて、このように「労働小説」は「白馬銀鞍」のような通俗小説めいたものも含め、「快活雄壮」ということにこだわらなければ、硬軟両様いずれでもありえたということであろうか。そして、半如夢の名とともにあった「労働小説」は、半如夢の名が『労働世界』誌上から消えたときに、終わっている。すなわち、明治三十二（一八九九）年一月一日『労働世界』第二十七号上、日鉄機関方罷業を書いた労働小説「不平党」が連載を終ったときに。以後、半如夢の名は『労働世界』のみならず、いずれの紙誌上にもない。

因みにいえば、二葉亭四迷の弟子横山源之助には、小説は処女作「貧しき小学生徒」（『家庭雑誌』

第三七号附録，明治二十七年九月十九日）一篇があるのみであった。日清戦争以後，下層社会・労働事情ルポルタージュ作家として登場。そして，明治三十（一八九七）年労働運動の開幕とともに書かれた「労働小説」は後年の労働文学の濫觴だったろうか。

## 別記一半如夢

『労働世界』をひろげてみると，文苑欄周辺に，半如夢と署名のある小説や随筆が，結構大きなスペースを占めている。そのことに気付いた人は少なくないだろう。そして，半如夢とは何者であるか，首を傾げた人も。

——初期労働運動を指導した一人。あるいは『労働世界』発行所である労働新聞社の社中の誰か。しかも文学に素養のある人間。その辺に限定されるのだが。そういう条件を充たしている人物は容易に想い浮かばない。そして，遺憾ながら，その筆名は他のいかなる雑誌，もしくは事典，参考書にも，けっして見当たらない。現在は労働運動史の研究はかなり細かな所まで，到らざるはないくらいにすすんでいるというのに。

『労働世界』誌上，半如夢なる筆名を名乗る人物は一体誰か。横山源之助の他に，初期労働運動の幹部に，文学と繋がる人間が誰かいたのだろうか。多くの筆名を持つ横山源之助に，半如夢はないから，彼ではないと思ってきた。ときどき半如夢なる名に行きつ戻りつしながら。そして何十年……。私が，半如夢が横山源之助であると気付いたのは，実はつい最近まったくひょっとした機会からである。さて，以下は半如夢なる筆名の考証である。

なぜ，半如夢が横山源之助であるか。ということは，なぜ，横山源之助が半如夢なる筆名を用いたかと問うことと同じである。しかも，半如夢なる名乗が同時に横山源之助本人の出生の秘密を解く鍵でもあったとは。いきなりこういっても判りにくいだろうと懸念されるが，実は横山源之助の生涯にはなお不明な点が多く，実の親などがその最たるものであろう。私はさきに『評伝横山源之助』を著わしたとき，出生の問題が横山源之助の人生に意外に大きな翳を落としていとおもい，できるかぎり詳細に書いた。いま，それを再説する積りはないが，ただ一つっておかねばならぬのは，左官職横山家に赤ん坊の時に貰われていった——源之助の実家某は郷里富山県魚津町の資産家であり，網元であった。同時にその家の下女を実の母とする赤ん坊は棄児同然であり，そのことは秘密とされてきた。ところが，意外なことに「半如夢」という筆名がその秘密をみずから明かしていたのである。

いま，『魚津町誌』，『下新川郡史稿』，あるいは『魚津市史』を開いて見ると，江戸時代以来郡役所の所在地であった魚津には，加賀前田藩から専売を許された三軒の魚問屋があったことが記載されてある。専売なるが故に，どの家も資産家であり，同時に網元であった。その魚問屋の一軒に代々半右衛門を名乗ってきた家がある。土地ではその家と呼ぶ場合，〇〇屋の屋号の他に，半右衛門さんといった。つまり，土地訛では“ハンニョムサ”となる。半如夢とは，なんと“ハンニョムサ”そのものの音を漢字化したものだったのだ。横山源之助は，『労働世界』誌上に「労働小説」を書くことを快諾した。そのときに，大胆にも，血の実家，実父の名，いずれともいえる名をもじって，みずからの筆名を半如夢とした。あるいは本人以外，郷友の誰かが判じ絵を解くように半如

夢の名乗の謎を解いたかも知れない。いや、むしろ、誰にも読解できないと信じたが故に遣われたのではなかったか。いずれにせよ、隠された実の父方への思い入れの深さがこのときに奔出されたのであろう。そして、生涯誰にも語らなかつたという出生の秘密が、実はこのようにみずからの筆名の中に一度のみ明かされていたのである。再びそれは遣われることはなかつた。ここの事情は、血のつながりのつよさと人間の胸裡にひそむ矛盾とを感じさせる、一つの逸事ともいべきものではないだろうか。労働事情の名作『日本の下層社会』を書き残した天涯茫茫生横山源之助、労働者のための文学「労働小説」を近代文学に刻みつけようとした半如夢横山源之助……。

### 横山源之助と岸上克巳

初期『労働世界』で、もう一つ注目しておきたいのは岸上克巳なる人物のことである。

岸上克巳（香摘）は初期労働運動時代、活版工懇話会創立メンバーの一人であり、戦後の一九六二年八十九歳で没するまで、いわば労働運動初期の生残りであったことで名が知られている。すなわち、片山潜・西川光二郎『日本の労働運動』、塩田庄兵衛編集代表『日本社会運動人名辞典』、埼玉県教育委員会編『埼玉人物事典』、あるいは雑誌『労働運動史研究』（第三十二号一九六二年七月）の松尾洋「岸上克巳逝く」等が記す通りである。また文筆家であった点については、『埼玉人物事典』が『埼玉毎日新聞』『埼玉日日新聞』をはじめ「関係した新聞紙誌は40余に及んだ」といっていることには驚かされる。だが、私が、岸上克巳（香摘）が明治期に漢詩人、漢文学者として著名であった岸上質軒（操）の実弟であることを知ったのは、宮武外骨・西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』のなかに、たった一行「宇都宮藩士岸上安応の子、質軒岸上操弟」とあるのを見てであった。その一行に触れて、私はなるほどと思ったのである。そこで、『日本近代文学大事典』を繰って見ると、岸上質軒の名があっても、岸上香摘の名は、当然ながらない。兄は高名な漢文学者であっても、彼は吃音のひどい、一印刷工に過ぎなかつたのだから。

しかしながら、いま私は岸上香摘を労働者作家の第一号ではなかつたかとかんがえている。後には、荒畑寒村らがそのようにいわれているけれども。それはともあれ、なぜそうかんがえるかという問題も合わせて、彼が一印刷工からジャーナリストへ転換をとげていった頃について、少し検討してみたいとおもっている。労働運動史上で把握されている、岸上克巳の経歴や人間像に少なからぬ見直しを迫るものがあるからである。岸上克巳は、前記したように、最始の労働組合である鉄工組合、日鉄矯正会とともに、初期労働組合を代表する活版工懇話会の創立メンバーの一人であった。かつ同懇話会の会報主任であった。同会報は現在一部しか存在しない。そこで、まず『労働世界』誌上に見当たる作品のみを、以下に列挙する。

監獄署内の活版工場 第八十二号 明治三十四年六月二十一日 岸上克巳

職工は進んで資本家に待遇改善を迫る可し 第八十四号 同年七月十一日 岸上香摘

途上雑感（一） 第八十五号 同年七月二十一日 香摘浪客

同（二） 第八十八号 同年八月二十一日 香摘浪客

治安警察令の修正に就て 第九十二号 同年十月一日 岸上香摘

労働問題と政府の干渉（下） 第九十八号 同年十二月一日 岸上香摘

他に、第二次『労働世界』第六年第三号明治三十五年四月二十三日に、岸上香摘「労働世界記者に寄す」がある。これは廃刊号——第百号上の作品と同題であり、つまり廃・復刊の弔文と祝文である。このように『労働世界』誌上にある、岸上香摘の作品は数篇に過ぎないが、中には今日も軽視できないものがある。たとえば、「監獄署内の活版工場」は、活版工である岸上克巳が、埼玉県監獄署の活版工場に技手として招聘されて行ったときのルポルタージュであるが、そのとき、「労働時間」、「工場の建方」、「幼年者教育」、「食事及起臥」、「病氣及負傷」、「食量及種類」、「二銭の積立」、「犯種及犯数」、「彼等の性状」等、署内のそれぞれにつき簡潔に報告した後、監獄署工場と民間工場との比較表を次のように掲げ、こういつていたのである。

「以上二者を比較せば現時の活版工が奈何に改良すべく要求すべき点を有するかを知るべし」とい  
い、「<sup>〔あゝ〕</sup>吁、活版工は遂に場内に於ける待遇は彼の囚徒に<sup>〔し〕</sup>だも<sup>〔ひか〕</sup>如かざるか。非耶。」と。

種目	監獄署囚人	民間活版工
労働時間	平均八時間	平均十時間
夜業	なし	無制限
幼年者教育	日曜日及毎 日三時間	なし
休業日	日曜大祭日	一ヶ月二回
空気流通法	完全	不完全
採光法	完全	不完全
非常立除口	入口一ヶ所 なるも窓よ り随意に出 るを得故に 危険なし	入口一箇所 のみ窓には 鉄柵及鉄網 を張る故に 危険の懼れ あり
食後休時間	一時間	三十分
病氣 <sup>〔ママ〕</sup> 急救法	完全	なし

この報告は、初期労働事情が囚人労働にも劣るものであったことを鮮やかに剔抉している。そして、両者の対照の仕方はどちらが監獄であるか、まるで天国と地獄を置き換えたよう。なんと簡潔な捉えようであろう。この多弁を弄せずしてなされてある、素朴、見事な表出法は、つぎの「途上雑感」という一篇にも結晶されているだろう。

◎本郷、神田の<sup>へん</sup>辺を雨の日も風の日も<sup>おも</sup>重もさうに荷物を<sup>かつい</sup>担で『ラオ屋<sup>きせる</sup>一煙管』と<sup>よ</sup>呼はりながら淋しげにトボトボと歩く<sup>こ</sup>老人がある、其荷物の前に札を<sup>つる</sup>吊して『<sup>しる</sup>つんば、七十六才』と記してある、<sup>あゝ</sup>吁、彼は古<sup>こ</sup>稀以上の老年者で加ふるに<sup>お</sup>聾である、(略)

◎右に<sup>ぎぜん</sup>巍然たる<sup>せきざう</sup>石造の日本銀行を見、左に濠を<sup>へだ</sup>隔て、<sup>すいせう</sup>翠松の滴るばかりなるを見ながら行くと、

一人の女乞食が何か喰ひながら行くあとから八ツばかりの子供が泣きながら何か請<sup>ねだ</sup>つて行く、あはれ一幅の悲惨画！と思ひながら行くと、頓<sup>や</sup>がて女乞食は立止つて大喝した、『怒しけれや手前も貰<sup>もら</sup>つて来い』、斯<sup>かう</sup>して立派な乞食に仕立てくれるのだ。

◎途上目に付くのは工場である、薄暗くして陰気臭き其工場を見る毎<sup>ごと</sup>に、ア、此裡<sup>このうち</sup>には額<sup>ひたい</sup>に汗してパンを需<sup>もと</sup>めつゝある、神聖なる労働者、フランクリンの云つた『立てる農夫は坐せる紳士よりも尊し』の定義に副<sup>そ</sup>ふ諸君が居ると思ふと、何となく懐かしくなつて見ない訳にはいかぬ、見ると其所<sup>そこ</sup>には貼札<sup>はりふだ</sup>して『何人と雖も時間中面会を許さず』と書いてある、人といふ者は何時<sup>なんどき</sup>奈何なる用事があるかも知れぬのに、如斯絶対的に面会を遮断されては如何なる不都合が生じるかも知れぬ、囚徒でさへも面会の自由は許されてあるのに！と思ふと涙が抑へきれぬ。

寸鉄肺腑を抉るような、鋭い、しかも涙もある、なんとも柔軟な感性ではないか。彼は六歳で小学校へ入り、成績拔群であったが、ひどい吃音であった。先生がある日その真似をした。彼は泣いて帰り、以来登校拒否児となった。が、独学を続けた。兄質軒同様漢学も。やがて印刷工となった彼は、兄質軒とは、天上界の人と下界のものほどにかけはなれた。しかし、文才においては、実は漢詩人質軒にも劣らなかつたのではなかつたか。

さて、そろそろ横山源之助と岸上克巳香摘との関係について述べねばならぬ。以下は横山源之助を調べる道すがら、たまたまというか、あるいは当然というべきか、ひっかかってきた事柄の一端である。

この二人が最初はどのようにして知り合ったか、審らかではない。孰れも、初期労働運動に熱心であった立場からすれば、二人はいつ知り合つていてもおかしくない。岸上香摘が『労働世界』に頻繁に寄稿しはじめた、明治三十四（一九〇一）年六月以降は労働運動ともども、第一次『労働世界』もいよいよ末期を迎えていたときであった。同時に、前年から引き続いた『職事情』の調査を終えて、同三十四（一九〇一）年三月労働運動の戦列に復帰した横山源之助が、片山潜と別れて、大井憲太郎と右派の労働組織大日本労働団体聯合本部を興そうとしていたときであった。したがって、『労働世界』上の岸上香摘の作品を、横山源之助が知っていたか微妙である。そして明治三十六（一九〇三）年大井憲太郎とも別れ、文筆家に復つた横山源之助は『毎日新聞』、『中央公論』その他に堰をきつたように多数の作品を書いた。また日露戦争が勃発するや、社会探訪記者を自認する彼は戦争が民衆生活に与える影響を見極めようとして、ただちに探訪を開始し、次のような作品を発表した。

- 戦争と貧民部落 『中央公論』 明治三十七年四月一日
- 戦争と手工業者 『実業世界太平洋』 同年四月一、十五日（二回）
- 戦争と労働者 『実業時論』 同年四月一日
- 戦争と労働社会 『毎日新聞』 同年四月二十八日～六月十四日（一九回）
- 戦争と労働社会 『中央公論』 同年五月一日

日露戦争の開戦は明治三十七（一九〇四）年二月であったから、四～六月の発表は即刻といつていい反応であったが、それは十年前日清戦争下の明治二十七（一八九四）年十二月に横山源之助が

『毎日新聞』に入社して、記者としてのデビューを飾った「戦争と地方労役者」がそうであったように、いずれも最末端の民衆の本音、姿をうつしとろうとするものであった。ことに、『毎日新聞』紙上の「戦争と労働社会」は、前年以來同紙に連載してきた「貧民の移動」（明治三十六年六月二十八～二十九日）、「不景気と職人」（同年七月三十日～九月十五日、四〇回）、「警視庁は職人社会を無視す」（同年九月二十日～十月四日、一〇回）等と同様の長篇であり、東西南北の名で、四月二十八日以降連載された。すなわち、「戦争と労働社会」は、小題「戦争と奉公口」（一～四）、「龍宮館の記」（一～五）、「砲兵工廠の一面」（一～七）、「提灯職人と蠟燭職人」（一～二）、「戦争と活版職工」（一～）から成り、六月十四日の十九回目に、花影生に引き継がれた。そのときの引き継ぎの言に、こうある。「友人花影氏、数日前、都市の工場労働者中、最も枢要の地を占むる活版職工の現状を詳記して、記者の許に送り来れり、花影氏は、十数年間活版職工の間に生活せる斯界の苦勞人にして、常に労働者状態の研究に意を致せる篤学の人、流石に局内者の事とて、余輩見聞の及はざる事実多し、掲げて諸君の参考に資す」と。このようにして、最後の項「戦争と活版工」は第一回六月十四日から十七、二十、二十二～二十三日まで、七回が花影生によって書かれ、かくして「戦争と労働社会」は全二十五回で連載を終えた。

この花影生が誰であるか。活版職工岸上克巳か。はたまた他の誰かか。香摘という号を常用した、活版職工岸上克巳が、実は繊細な歌人であり、俳論を書くときなどに、ときに花影という筆名を用いたことを知っている者は今はないだろう。左様、花影とは岸上克巳であった。そして、『毎日新聞』紙上に、岸上香摘という名が現れ、日露戦争下の労働者状態をつぎつぎに報じて行くようになるのは、東西南北から花影の名で「戦争と労働社会」を引き継いだ、その翌月のすなわち明治三十七（一九〇四）年七月五日「社会問題雑観」以後である。因みに、紙上における、その活動は翌三十八（一九〇五）年末まで続く。一方、その登場に引き換え、横山源之助の名は、「戦争と労働社会」以後紙上から完全に消えるのである。それはどういうことか。

この事実を、どうかんがえるべきか。おそらくは、このときをもって、二人は『毎日新聞』の社会探訪記者の地位を交替したとかんがえられる。すなわち、岸上克巳が一活版職工から、ついに『毎日新聞』記者となることができたのは、横山源之助の熱っぽい推挙があったからにちがいない。「斯界の苦勞人にして、常に労働者状態の研究に意を致せる篤学の人」と最大級の推薦の弁をもって、惜しげもなく横山源之助は、才能ある、吃音の一労働者岸上克巳に探訪記者の席を譲ったのである。

それなら、横山源之助本人は以後どうしたか。すなわち『毎日新聞』紙上に載せていた、長期報告「戦争と労働社会」の執筆を途中から花影岸上克巳に替ると同時に、明治三十七（一九〇四）年六月、みずからは今度発行されることになった月刊の業界雑誌『東洋銅鉄雑誌』（明治三十七年六月二十五日創刊）の編集長となっているのである。そして、『毎日新聞』に後継者として推挙した岸上克巳をして、やはりここでも二、三の作品を書かしている。すなわち、

電鍍工業の率先者（宮川電鍍工場） 『東洋銅鉄雑誌』第一卷第三号 明治三十七年九月十五

日 岸上克巳

金物をあしらひたる句 同号 岸上香摘

清夜吟（新体詩） 第一卷第四号 同三十七年十一月六日 岸上香摘

である。そして横山源之助が同誌を辞した、翌明治三十八（一九〇五）年初頭からは、同誌上に岸上克巳の寄稿を一点も見ることができない事情こそは、横山源之助と岸上克巳との特殊な結び付きを何よりも示唆しているとみるべきであろう。なお、この頃横山源之助は『中央公論』の常連執筆家であった。その明治三十七（一九〇四）年九月、『毎日新聞』の社会探訪記者となって早々の岸上香摘が「電車で逐はれたる人力車夫」というルポルタージュを同誌に載せている。そして横山源之助が同誌に「社会的文士を評す」（明治三十九年九月）を書いたとき、この作品を高く評価していたことを付記する。

ところで、岸上香摘が『毎日新聞』記者となった時につき、『埼玉人物事典』（平成十年）は「36年毎日新聞に入社」といい、『日本社会運動人名辞典』（一九七九年）も同年とし、あまつさえ何の根拠があつてか、「03年には幸徳秋水の紹介で毎日新聞社に入社し」とまで書いているのである。この二書が岸上克巳の『毎日新聞』入社時を共に明治三十六（一九〇三）年としたのは、おそらくは、雑誌『労働運動史研究』第三十二号（一九六二年）の「岸上克巳老逝く」中にある、筆者松尾洋の記述「明治三十六年には東京毎日新聞社に入社され」、および同文中にある子息岸上菊雄が纏めた父香摘の略歴「一、明治三六年、東京毎日新聞社に入社、社会、労働を担当する」とある箇所と典拠したものにはちがいない。しかしながら、同じ「岸上克巳老逝く」の中にある、生前の聞き「岸上克巳談」の一箇所に、こういう行がある。「私は日露戦争がおこって間もなく、毎日新聞社にはいりまして、その後労働組合運動とは縁がとなくなりました」と。

日露戦争の勃発が明治三十七（一九〇四）年であることは、小学生でも知っている。前記の書々はこの岸上克巳本人の話をどう受け止めていたのであろう。生前、岸上克巳本人が語ったこの一条は、まさしく私が横山源之助との関係で述べてきた経緯と寸分も違ってないではないか。ただ横山源之助という、歴史に栄えない男の名が脱落しているだけのことだ。ましてや、幸徳秋水などという歴史に華やかな男が取って代って登場するとは、どういうわけであろう。

それはさておき、日露戦争時下、横山源之助から分身、後継者とみなされた岸上克巳は、一活版職工から『毎日新聞』記者となり、横山源之助に替って、紙上に社会・労働報告をつぎつぎに発表して行く。それらはいずれも、日露戦争時下における、貴重な労働者状態の報告であるので、以下に作品を列挙しておく。

社会問題雑観 明治三十七年七月五日 岸上香摘

社会雑観 同年七月六日 岸上香摘

労働界雑観 同年七月七、十二日 岸上香摘

時局と細民 同年七月十七日 岸上香摘

人力車夫問題 同年七月二十一日 岸上香摘

戦争と職人 同年八月三日～九月三日（十九回） 香摘生

菓子屋職人（六回）

料理人（六回）

蕎麦職人（七回）

労働界偶感（上）（下） 同年八月十二～十三日 岸上香摘

労働界雑感 同年十一月九日 岸上香摘

現下の労働界 同年十一月十一日 香摘生

上半季の労働界 同年十一月十四～十九日（六回） 香摘生

埼玉の工女 同年十一月二十六日～十二月二十三日（十四回） 香摘生

略して明治三十八（一九〇五）年は、「昨年の労働界」（一月一日）、「鉞夫問題」（二月十一日～七回）以下、「労働界雑観」（三月）、「労働界雑観」（八月）、あるいは「失業者問題」「工場と肺病」「生活費と賃銀」等、長短の社会・労働報告で紙面を飾り、同年末で終る。したがって、『毎日新聞』在社はそのときまでであろう。

さて、開戦から九ヶ月目、遼陽、沙河の会戦を経て、日露戦争もいよいよ後半戦に入り、旅順、二〇三高地戦に死闘を繰り返していた頃、十一月十一日の「現下の労働界」を見ると、中にこういう一節がある。

△季漸く冬に入りて一般の工業界稍活気を帯び、<sup>したがつ</sup>随て労働者も其影響によりて漸く順境に入らんとせるが如し、然れども開戦以来受たる労働者の創痕容易に癒し難く、<sup>しかのみならず</sup>加之各工場の緊縮は未だ全く緩みたるに非ざるが故に、彼等が順境に向へりと云ふも、其程度は之を例年の当季に比すれば殆ど云ふに足らざる也

△今去年の本月と本年のとの労働者の賃金を比較すれば、最も甚しきは経師職にして約三割の低落を来し、<sup>きた</sup>建具職、<sup>これ</sup>畳職、<sup>ぬし</sup>下駄職、<sup>さしもの</sup>和服仕立職等之に次ぎて約二割、家根職一割五分、大工職、<sup>い</sup>塗師職、指物職、一割、左官職五分の割合なる如し、但し、大工及左官は冬営準備の爲め先月来渡清せる者稍多数なりし為め、漸を追て賃金の昂騰を来すの形勢あるを認む、而して以上の職人は其賃金の低落したるに止まらずして、一般に稼ぎ日数を減少せるを以て、実際に於る一ヶ月の収入は、去年に比して約三四割の低減と見るを得べき也

序にいうなら、岸上香摘の報告の対象は多岐多様にわたる。人力車夫、印刷工、鉄工、洋服仕立職、木挽職、石工、靴工、染物職、湯屋職人、米搗職人、大工、左官、家根職、瓦葺職、煉瓦積職、指物職、経師職、建具職、船大工、塗師、<sup>い</sup>鋳物職、<sup>ぬし</sup>下駄職、馬具職、桶職、ブリキ職、綿打職、<sup>い</sup>畳刺職、<sup>い</sup>鋳職、紙漉職、煙草職、植木職、陶器職、酒造職、醤油造職、理髮職、下男、下女、土方鳶人足、貧民窟等々。それはまさしく横山源之助がおこなったものに比肩できるだろう。

岸上克巳香摘は平民社流の社会主義者らとも交わり、週刊『平民新聞』『光』『新紀元』等にも寄稿した。『毎日新聞』を去った後は、埼玉県下のジャーナリズム界に重きをなしたことは、すでに述べた。

以上が、黎明期労働運動期に一活版職工であった、岸上克巳が横山源之助の引立によって労働事情ルポルタージュ作家へと一人立して行った経緯である。筆をいそぐあまり、歌人としての岸上香摘に触れる機会を逸した。彼は只ごつごつの闘士のみではなかった。最後に、新体詩「清夜吟」の一節を引いて終ろう。

吾も悲しき落魄の  
涙を酒にかくれたる  
今宵ぞ、君よ哀しくば

月に背<sup>そびら</sup>を向けて泣け

さらばよ、清き<sup>はなみ</sup>花笑に

淋しき人を賑はせよ

吾も今宵は歓楽の

酒瓶<sup>もたひ</sup>叩いて唄ふべし

（『東洋銅鉄雑誌』第一卷第四号，明治三十七年十一月六日）。

以上は、横山源之助と一印刷工岸上克巳を通して見た、黎明期労働運動と文学との関係であるが、文学がやはり熱っぽくかかわっていた一端が多少とも瞥見できただろうか。

（たちばな・ゆういち 横山源之助研究家，元法政大学大原社会問題研究所所員）

## 法律文化社

〒603-8053 京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71\* 価格は定価（税込）  
☎075(791)7131 FAX 075(721)8400 <http://www.hou-bun.co.jp/>

# 社会政策における福祉と就労

社会政策学会編「社会政策学会誌第16号」

●3150円

## I 共通論題II 社会政策における福祉と就労

福祉と就労をめぐる社会政策の国際的動向

——Making Work Pay政策に関する対立構図を中心に……埋橋孝文

福祉政策の中の就労支援——貧困への福祉対応をめぐる……岩田正美

職業生活への移行支援と福祉……小杉礼子

就労・福祉・シニアズンシップ……田村哲樹

福祉改革の時代における市民像……武川正吾

## II テーマ別分科会II 報告論文と座長報告

社会契約の再構成……田中拓道

——社会的排除とフランス福祉国家の再編……小田川華子

貧困政策にみるフィリピンにおける社会開発政策の特徴……田中拓道

パートタイム社会オランダ……権丈英子

——賃金格差と既婚男女の就業選択……阿部 彩

## III 企画論文

The Korean Developmental Welfare Regime……Moo-Kwon CHUNG

Social Transformations and the Development

of Welfare Pluralism in Reform China……Yuegen XIONG

## IV 書評

投稿論文

マネジドケア普及期における米国企業の従業員医療給付

——医療保険購入戦略の分析を中心に……長谷川千春

相対的剥奪の実態と分析……阿部 彩

——日本のマイクロデータを用いた実証研究……阿部 彩

# 地域福祉の主流化

武川正吾著

●2415円

人口の高齢化が進むいま、行政、地方自治、地域社会などにかかわるさまざまな課題が、地域福祉のなかに集約的にあらわれている。この「地域福祉の主流化」と呼べる状況の契機となった社会福祉法の概要をさぐり、「地域福祉計画」の理念とポイントを提示する。

姉妹本

福祉国家と市民社会 ●イギリスの高齢者福祉 ●2695円  
福祉社会の社会政策 ●続・福祉国家と市民社会 ●2695円